

## 在外研修報告

### (1)

1981年9月8日から11月7日まで、文部省在外研究員としてエジプト・チュニジア・ケニヤを訪れた。私の専門柄、遺跡の保存修景の現場を歩き廻ることに徹した2カ月であった。

エジプトは主滞在国内だったこともあって最も印象深い。首都カイロではカイロ博物館に通うかたわら、安い定宿探し、アスワン行汽車の予約、チュニジア行飛行機の予約、考古局での遺跡見学フリーパーミッションの取得、近くのギザのピラミッド見学などであつという間に1週間が過ぎる。それでも片言のアラビヤ語、バスへの飛び乗り方、乗合タクシーのつかまえ方を覚え、南はアスワンから北はアレキサンドリアまでの狭長なナイル河沿いの遺跡巡りを始めた。ダムによる水没から救い出されたアブ・シムベル神殿とフィレー島の神殿は、保存技術の上で感心したが、他の遺跡の保存については参考にすべきことは何もないといつてよい。始めの内は石造遺跡の見事に圧倒されていたが、すぐに慣れ、修理技術の稚拙さや遺跡の環境整備の遅れに目がいくようになった。ナイル河がこんなに小さなものとは思っていなかった。やはり水の無い土地であり、それだけにアスワンの新旧ダムが原因なのか僅かに降雨量が増えたことで遺跡の風化が心配されていると聞き納得できた。日本のような水の中の国とは遺跡保存問題がまるで違う。乾燥には強くても僅かな水に弱い。日本の遺跡保存屋の出馬時期かもしれない。もう一つ強い印象は、一般エジプト人と遺跡の結びつきについてである。外国人向けの観光資源としての扱いから脱するのはいつのことであろうか。遺跡の修理と共にピラミッドや横穴墳の部分閉鎖など考古局の努力はみられるが、国民の意識はまだ遠いところにあるとみた。知り合った少壮建築家にエジプトの著名な建築家の名をきくと、数名をあげ、しばらくして苦笑しながら「最高の建築家はファラオだが」と言ったことを思い出す。サダト大統領暗殺の時は、たまたまカイロに戻っていた時で驚いたが、街の連中に国内問題だから心配するなと言われた。

チュニジアでは、首都チュニスに滞在し、カルタゴ遺跡(ほとんどローマンカルタゴ)を巡った。アントニヌスの浴場のように立体的に遺構を残しているものは仲々の迫力だが、総じて平面的でありエジプトの後では何やら日本的に感じた。ただ街は旧宗主国フランスの影響か、整然とした道、デザインの良い建物、街路樹、公園をもち実に美しい。メディナと呼ばれる旧市街は日本でなら歴史的建造物群の指定を受けるところか。バルドー博物館は内装、展示ともにセンスが良く、エジプトのアレキサンドリアでも感じたことだが、地中海に面した都市の垢抜けしたセンスは共通のことかと思った。日本なら神戸、横浜といった感じである。

ケニヤでは、ひたすら広大な自然公園を走り廻った。エジプト、チュニジアのように気ままな独り旅はできなかったが、憧れの山、動物、人々に触れ合いながら、物質生活の向上と自然保護のかね合いについて考えることができたのは幸いであった。

(安原啓示)

(2)

ポリネシア及びメラネシアの伝統的な民家・集落について、その現況と、この地域の民家に残っている古い手法・形式などを探るため1982年3月15日より48日間、フィジー、西サモア、仏領ポリネシア、ハワイを訪れた。現地では極力広範囲に行動したが(博物館10, 集落約100)地域全体からみればほんの一部を概観したに過ぎない。

伝統的な村・家の最もよく残っているのは西サモアで、フィジーがこれに次ぎ、他は野外博物館を除くと皆無かそれに近い。博物館は古い家の失われたハワイ、仏領ポリネシアなどに大きなものが作られている。この地域の民家を西サモアの例(右図)によって説明したい。

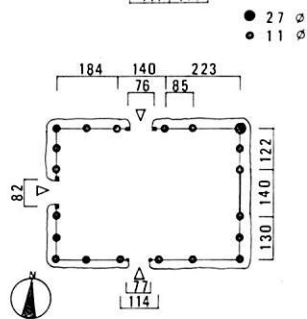
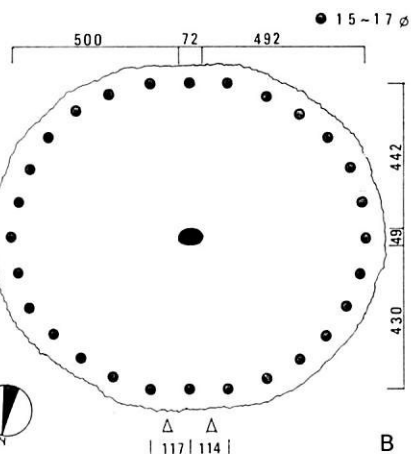
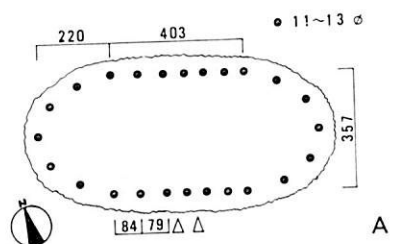
1、建物の軒より内側を基壇状に40~100cm積上げ、床の表面に細かく砕いたサンゴ等を敷詰める。清潔でさらっとした床面にパンダナスのマットを敷くが、全面ではなく、来客などに応じ適宜に敷く。

2、構造は中央の長方形部(イツ)と両端の半円形部(タラ)からなるが、平面は内部に間仕切のない一室住居。イツの海側に主な出入口をとり、どちらかのタラで就寝する。外との仕切りはヤシの葉を編んだすだれを付けている以外に壁は一切なくきわめて開放的である。

3、柱は深さ1~3mの掘立、構造は一般に単純で梁のない家もある。部材は大きな、手の込んだ加工はせず、部材の大きさに合った原材を使う。仕口は穴をあけず、突起をつけ縄またはつるでしぼる。これは近年まで金属工具を使わなかったためであろう。建築材料はすべて村の周辺から採取し、商品はない。

仏領ポリネシアの家にはヨシズのような材料の壁があり、フィジーの場合、家は方形が主流で外壁は草・ヤシの葉などの厚い大壁となる点が西サモアと異なっている。また現在は見ることは難しいが、18世紀後半の記録には、屋根を地上に伏せた形の家があって、この地域の民家の古型を示唆するものとして注目される。

(吉田 靖)



A. 西サモア・ウポール島サラムム村の民家  
B. 西サモア・サバイツイ島ファガマロ村の集会所  
C. フィジー・ヤサワ群島ナズラ村の民家  
(単位 cm)